

## ジャーブネット発足15周年記念 シンポジウム「地域の木造住宅とその担い手への期待」開催 ～ 現代の“名棟梁”を目指し、個々の成長と連携を強化 ～

日本最大の工務店ネットワーク「ジャーブネット」(主宰：株式会社アキュラホーム 代表取締役社長 宮沢俊哉、東京都新宿区)は、7月4日(木)に目黒雅叙園(東京都目黒区)に於いて「第14回ジャーブネット全国決起大会」を開催し、ジャーブネット発足15周年を記念したシンポジウム「地域の木造住宅とその担い手への期待」を行いました。



### 全国決起大会概要

名称 : 第14回ジャーブネット全国決起大会  
対象者 : ジャーブネット会員他  
開催日 : 2013年7月4日(木)  
参加 : 460名

本大会は、年に1度、全国各地の会員とアキュラホーム幹部社員が集い、1年間の活動実績を発表し、当年の方針を共有する場として開催しています。1998年のジャーブネット設立時より開催され、今年度は発足15周年を記念して一般の方へも公開するシンポジウムを実施しました。「地域の木造住宅とその担い手への期待」をテーマに、高品質の住宅を提供する技能集団のマネジメントをする、我国古来の“棟梁”についてその役割を検証し、現代におけるつくり手のあるべき姿を様々な立場から見つめ直します。

### ■ 主題解説 「地域の木造住宅とその担い手への期待」 高田光雄氏 京都大学大学院教授



地球上のさまざまな地域で、それぞれの地域の環境と文化に適合した木造住宅がみられます。現在、日本の新設住宅の5割以上が木造、戸建て住宅の7割以上が木造在来工法で建てられています。“在来”とはいえ近年では、地域を問わない工業製品・部品が多数採用され、外観では全国一律の工業化住宅と見分けがつかなくなっています。伝統技術と新技術導入のあり方について考えなければいけません。一方、担い手については、大工就職者数は大幅な減少傾向にあり、20年で半減、急速な高齢化も進行しています。技能者の確保・育成は急務で、伝統技術の継承だけでなく、ユーザーニーズ、環境問題への対応など様々な社会的要請に対応した多面的な技術の向上を図っていかねばなりません。また、地域ビルダー、パワービルダーが登場し、建設業と不動産業の融合なども進んでいます。原木供給者、製材事業者、プレカット事業者などとの垂直連携と、ジャーブネット会員のような工務店、大工などの水平連携も試みられていますが、この延長線上に地域に根ざした住宅づくりを考え普及させる仕組みができているのか、住まい手にとって本当の意味で居住の豊かさを実現するための支援の仕組みになっているのかを、議論する必要があると思います。

### <本件について報道関係からのお問い合わせ先>

株式会社 アキュラホーム 広報課 堀越・若林 Email: horikosi@aqura.co.jp

住所: 東京都新宿区西新宿 2-6-1 新宿住友ビル 34F TEL:03-6302-5010 (直通) FAX:03-5909-5560

## ■ 基調講演「伝えたい気仙大工の活躍」高橋恒夫氏 東北工業大学教授



「気仙」とは岩手県の沿岸南部の地域名で、今の陸前高田市、大船渡市、住田町を指します。大工の分類は様々ありますが、在方（田舎）に大工が集中的に居住し、主な活動形態が出稼ぎとなる大工を「在方集住大工」と呼び、気仙大工はこれにあたります。彼らは大工技術の普及や日本の近代化・災害復興に大きな役割を果たしてきました。岩手県南から宮城県北の古い木造建築物が解体や修理をされる際に「気仙大工」と記された棟札（築年や大工の棟梁の名を記した札）が見つかるほど、気仙大工の技術が高くブランド化していたことが伺えます。代表的なものとして岩手県の文化財に指定されていた大肝入吉田家住宅がありますが、東日本大震災によってこれらの多くが無くなってしまいました。復興においては文化庁、国交省が「地域の文化遺産を活かした復興まちづくり」をテーマとしており心強く感じます。地域でもそうした動きは少しずつ表れてきており、震災を契機に市民レベルで郷土の歴史や文化を再考する気運が感じられます。今泉集落（元和以降、代官所と吉田家の気仙大肝入の置かれた郡政の中心地）は壊滅的な被害を受けましたが、震災前の豊富な資料の調査やその研究が蓄積されています。今泉の歴史や文化を重く受け止め、その固有の価値を共有し、発信しながら継承・復興していくことが求められています。今泉の復興は全国から注目されていますので、歴史や文化を継承したまちづくりを目指していきたいと思っています。

これからは日本林業の再生、伝統工法を取り入れた新しい木造建築技術の開発、木造による多様な復興住宅がカギになってくると思います。またそれが建てて以降のメンテナンス、そして後継者育成に繋がっていけば、日本の木造建築の復活と再生が可能になるのではないのでしょうか。

## ■ 基調講演「地域のまちづくりにおける工務店の役割」三井所清典氏 (株)アルセッド建築研究所代表



木造の住まいづくりとまちづくりについて、「連携」をテーマに活動事例を数点ご紹介します。まずは佐賀県の有田町。美しい景観を損なわないまちづくりを目指して、昭和 58 年から工務店や大工と勉強会を重ね、地域の景観に合わせまち並みに潤いを与える家づくりを進めてきました。徐々に我々が建てた家が増えていくと、信頼が増して更に依頼が増えるようになっていきました。次に、富山県の富山県優良住宅協会の事例ですが、ここでも工務店 20 数社と建築家 4 名で勉強会を行い、4つのチームに分かれて県産材を多く使った共同設計を行いました。これらは展示会で発表したところ好評で、県住宅供給公社に依頼して建売住宅として販売しました。マスコミの感心も高く度々取材を受けました。島根県の例では、石見流のまち並みをつくるために大手ハウスメーカーなども巻きこみ地域で主流の赤色瓦を採用するなど、景観に相応しい家づくりを実現しています。平成 20 年にスタートした「環境省エコハウスモデル事業」では、環境省のサポートのもと 20 地域それぞれの気候風土や特色を生かしたエコハウスの実現と普及に取り組みました。自治体毎に設計者、施工者、大工・佐官などの職人、材料供給者、役所職員皆と一緒に勉強会を行い、モデルハウスを竣工。地域のエコハウス普及に取り組みました。すぐに実現することは難しいですが、自治体で行われる計画には主体的に参加する意思表示をして、要請があったときに応えられるようになればと思います。奈良県桜井市では、宮大工が金物を使わない遊戯施設を建築しました。これらを踏まえ、木造の可能性は大きくあると思います。

教え子の一人が、“ものづくりが分かる設計士”を目指してものづくりに関わるようになると、自身で施工したくなり、ついには独立して工務店を始めました。設計者、施工者の将来も彼の姿から見えてくる気がします。

## ■ パネルディスカッション「地域の木造住宅とその担い手への期待」

コーディネーター：高田光雄氏

パネリスト：高橋恒夫氏、三井所清典氏、  
園田眞理子氏（明治大学教授）、宮沢俊哉

基調講演の内容を踏まえ、地域木造住宅の意義、木造住宅生産の担い手の課題、東日本大震災住宅復興と地域木造住宅生産者の役割についてディスカッションしました。



**高田**：先ほど高橋先生と三井所先生からお話いただきましたが、パネルディスカッションから参加いただいたお二人に感想を伺いたと思います。



**園田**：お二人のご講演を伺い共通して感じたことは、木は素晴らしいということです。実は震災の日、私は偶然福島県の郡山駅で震度6の揺れを経験したのですが、その後、木の温かさに触れて慰められました。15年ぐらい前、三井所先生と私は石川県の石造りの古い建物を美術館に再生するコンペの審査会でお会いしており、その際三井所先生は木と石の良さを活かす案を押し、私はそれとは反対のモダンな案を押ししました。今にして思うと、あれは私の若気の至りでした。震災後

改めて木の良さを見出しました。もう一つ、高橋先生のお話にあった在方集住大工が全国各地で活躍して信頼を得ていたことは、何も昔の話ではなく、現代に通じる新しい可能性を示唆していると思います。本日は住まい手の視点から、皆さんと大いにディスカッションしたいと思います。

**宮沢**：高橋先生の気仙大工のお話から棟梁とは何か、どう発展してきたのかを学ばせていただき、まだまだ深く勉強したいと感じました。三井所先生のお話では、設計士から工務店を立ち上げた方の事例をご紹介いただきましたが、ジャーブネット会員も多種多様で、建築家から工務店になった人、不動産から工務店になった人、漁師からなった人もいて、皆で侃侃諤諤（かんかんがくがく）やっています。また、石見のプレハブメーカーと地元の工務店が協調した事例では、意識を揃えればあのようなまち並みができるのだと嬉しくなりました。



**高田**：三井所先生は復興木造住宅にも深く関わっておられますが、東日本大震災住宅復興と地域木造住宅生産の役割についてと、その課題をお伺いしたいと思います。

**三井所**：今回の震災で一番特徴的な現象は、木造の仮設住宅ができたことです。これは地域の力でできたことです。木造仮設住宅は、去年の愛知県の建築士会の展示会で、岐阜県の白川村が仮設住宅を展示しました。今は和歌山県の建築士会で仮設住宅の設計を終えています。これら予行演習や準備はとても貴重なことだと思います。

復興住宅の件では、中越地震のときに山古志村（現：長岡市山古志村）の復興に協力させていただきましたが、30年先を見据えて木造軸組工法でつくらなければいけないと提言しました。別々の技術でメンテナンスすることはままならないからです。また、「未完成な状態で山（村）に戻ってください」と様々な人に依頼しました。完成後すぐには山の工務店・大工の仕事は発生しませんので生きていけなくなり、社会が崩れてしまいます。要するに、成長する家、復興した後でも工務店に増改築の仕事がいき、大工やいろんな職種の仕事が生まれるように、復興の仕方を考えなければいけません。これはとても大切な

ことだと思えます。戦後材料が少ないとき、学校などはそのようにしていました。

通常のつくり方をしていては間に合いません。需要を埋めるためにはつくり方のシステム、体制を変えていかなければいけない。林業や製材業、メーカーたちと工務店や設計者、金融、保険とセットになって住民の相談にのり、すぐ対応できる体制をとらなければハウスメーカーやパワービルダーに負けてしまいます。地域の役割の中でチームを決め、短時間にユーザーの気持ちを理解したものをつくっていく仕組みをつくらなければいけません。それは早くしなければ間に合わないと思います。

**高田**：高橋先生のお話では、今回被災した地域ではたくさんの木造住宅が無くなってしまいましたが、もう一度「木のまち」をつくっていくというお考えですね。

**高橋**：私が長年調査してきた場所は「気仙大工」の発祥の地でしたが、震災後の復興住宅建築に気仙大工が力を発揮できなかったことが非常に残念です。道具が流されてしまい腕を発揮できる場がありませんでした。仮設住宅は行政の指導のもと平たんな場所を選び建築しましたが、彼らであれば多少傾斜があっても建てるのができたという話を度々聞くと、やはり平時に緊急時の体制を組んでおくことや道具を高台に置いておく必要があると思います。また、日本の林業全体を見直して、木造で復興住宅を建てると、伝統工法だけではなく新しい木造の可能性が具体的に見えてくる。ピンチをチャンスに変え、復興住宅を多様な木造住宅で建てて欲しいと思います。工務店の大工たちの色々なアイデアが発揮でき、行政を動かして鉄筋コンクリートの復興住宅だけでなくその地域独自の復興住宅があちこちで生まれればと願います。そしてもう一つ、気仙大工は、出稼ぎで行く場所は大体決まっており、家を建てて終わりではなく行く度にメンテナンスをしているわけです。そこで信用が生まれ次々に仕事をもらっています。建てて終わりではなく、つながりも非常に大切なのです。

**高田**：園田先生、復興住宅と住宅生産の観点でお考えを聞かせてください。

**園田**：実は私、半分当事者なんです。先ほど郡山にいたと話しましたが、理由は築 60 年近い親の家が空き家になっており、その片付けをして帰ろうとした際に震災に遭いました。

一個人の立場でいうと、震災ではまず“生活をつくる”ということが課題だと思います。家族のこと、仕事のこと、そしてお金の問題。工務店さんとお話する前の段階に大きな壁があり、そこから住まいの確保までトータルで考えなければいけない。単に家をつくれれば良いということではないことが、今回の震災の大きな問題だと感じました。それとは別に、50 歳以上、あるいは 60 歳 70 歳で、最初に建てた家が 30 年 50 年経ってこれからどうしようというケースの方が若年層ファミリーよりも潜在的に多いと思います。そういう人たちの立場にたった家づくりをもっと考える必要があると思います。

**高田**：その話を地域の工務店さんに話してどんな反応でしたか。

**園田**：実は、震災に遭う前までは、その親のボロ家を建替えようと思っていました。親が高齢なのもあり私たちが主導して、福島の工務店さんや、全国規模の東京のモデルハウスを見に行ったりしました。ただ、遠隔地にいる子供が親の家のことを相談しようとしているのにどこも相手にしてくれません。そこで福島のモデルハウスも見に行きましたが、ファミリー向けが殆どで、若い営業マンでは私たちの聞きたいことの答えが用意されていませんでした。日本の住宅業界のターゲットが変容しているにも関わらず、お客様のゾーン設定や、何を相談したいのかへの対応ができていないと思います。

**高田**：高橋先生は、気仙大工の姿を通して大事なのはきちんとメンテナンスをすることだとお話いただき、園田先生は、その地域で暮らす人たちへのサポートがないといけないということで、地域の住宅に関わる産業と考えるとつながるところがあると思いますが、宮沢主宰はいかがでしょうか。

**宮沢**：アキュラホームでは応急仮設住宅を約 100 戸建築しましたが、地元の人たちが復興住宅の役に立たねばと考え、ジャープネット会員の中から福島、岩手、宮城の 3 カ所で連合をつくり、福島が採択を受け地元の光建設が中心となって約 100 戸建築しました。しかし震災後は、大手ハウスメーカーが全国各地から営業・設計・職人を送り、地元の人たちには仕事がなかなか回らない・・・工務店と一言でい

っても、住まい手の立場からみるとどこが良いのか分からないと思います。家守り（アフターサービス）をやる場所もあればない場所もあり、設計力・デザイン力がある場所もあればない場所もあります。今は地域の工務店にも仕事がありますが、この需要が止まったあとを考えると不安です。地元の人たちが連携し、目先のことでなく成長する家など、地域の工務店の連携あればこそできることだと思います。結果、先ほどの園田先生のお困りも解決できるのではないのでしょうか。もちろんジャープネット事務局からその地域の工務店をご紹介することもできます。我々も復興、美しいまちづくりができればと思います。ぜひ協議が出来る場があればよいのですが。

**高田：**最後に、地域の木造住宅の担い手という点について一言ずつお願いします。

**高橋：**気仙大工だけでなく、在方集住大工と呼ばれる人たちは、地元需要がなく出稼ぎに出ています。そのため、出稼ぎ先の大工より腕を上げなければいけないため色々な勉強をしています。そして、それを支える人たちがいました。気仙大工の場合は仙台平野の地主さんたちがそうでした。復興住宅もネットワークを通じて全国の技術を結集し、木造の色々なアイデアが盛り込まれたものが各地で生まれることを私は夢見ています。是非連携して復興支援をしていただければ有難いです。

**園田：**リーマンショックと震災を契機に見えてきたことは、売り逃げ建て逃げの時代は終わったということです。家守り、地域守り、まちづくりとありますが、それへの答えは「富山の薬売り方式—今年の御用やお困りごとはありませんか・・・？」です。これが起死回生の策ではないのでしょうか。税の問題・ローン・家族・相続・生活のスタイルなどを一つなぎにする、高田先生の言われるように水平連携を拡大して、そうした専門家集団のユニットを地場で作ること。異業種間、需給者間連携で共存共栄を図ることがカギになると思います。最後に木材は地産地消で、専門家ユニットはスマート集団として声が掛ければ全国どこでも駆けつける。困った園田が福島のことを東京で相談したいとなれば、そういう方が受けて下さる。そうなれば、今日の答えが見えたのかなと思います。

**宮沢：**木造住宅の担い手の課題を考えたときに、匠の原点である気仙大工の歴史から見えてくるのは、技術を磨き続けている点です。それも住み手を意識し、いかに磨いていくか。現在大工や職人が一匹狼化しているのを大工衆となり、設計士、そして住まい手、行政、地域社会を巻き込み、全体を考えられるリーダーが必要だと思います。リーダーは建築士でも営業からでも、大工からなった人でもいいと思います。全体バランスを図り、匠＝棟梁を一度見つめ直すべきだと思っているところでした。今日お話を伺い、まず我々はつくり手として昔の棟梁というものを感じ取り、もっと深掘りして住まい、まち並み、社会、生活を重く受け止めなければいけない。住まい手が豊かで幸せに暮らし、何代も住み継いでいくというのは、そこに生活があるからです。暮らしを考え、そして社会とどう共存、調和していくかというところが大事だと思います。そういう担い手がこれからどんどん増えていくべきですし、私もさらに精進したいと思います。

**高田：**高橋先生の講演にもありましたように、気仙大工のケースでは、つくり手の誇りが住まい手の誇りにつながり、それがまちや地域の誇りになっていく、そういうプロセスが景観にも表現されているように思いました。建築を通じて地域社会に貢献することの意味を問い直し、あるいは園田先生のお話にあったように、地域に根ざした産業の担い手として、地域の生活を総合的にサポートしていく方法を考えなければいけません。それが地域の木造住宅生産者やジャープネットの次の目標にもなっていくと思います。



## 講師プロフィール

### 主題解説・コーディネーター

高田 光雄(たかだ みつお)

京都大学大学院工学研究科建築学専攻・教授

### 基調講演・パネリスト

高橋 恒夫(たかはし つねお)

東北工業大学工学部 教授

### 基調講演・パネリスト

三井所 清典(みいしよ きよのり)

株式会社アルセッド建築研究所 代表取締役所長

### パネリスト

園田 眞理子(そのだ まりこ)

明治大学理工学部 建築学科 教授

### パネリスト

宮沢 俊哉(みやざわ としや)

ジャーブネット主宰、アキュラホーム代表取締役社長